

1) 著作権保護のための表示

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

2) 研究会基本情報

タイトル：「スワヒリ語諸変種にみられる多様性とダイナミズムへのアプローチ」
(2020年度第1回研究会)

日時：2020年8月8日（土曜日）午後2時より午後5時

場所：オンライン開催

1. 杓掛沙弥香（AA研共同研究員，日本学術振興会特別研究員／AA研）

「アフリカ型多言語主義」への一考察：タンザニアにおけるトランスランゲージングの事例から／A study on the African multilingualism: Based on Translanguaging theory

2. 全員

プロジェクト成果のとりまとめと今後の展開についての議論

今研究会は、研究発表1件と全体討論の二本立てで行われた。杓掛沙弥香氏による発表「「アフリカ型多言語主義」への一考察：タンザニアにおけるトランスランゲージングの事例から」においては、ヨーロッパ近代における多言語主義／状況観のアフリカの状況への直接的な適用に対する批判 (cf. Lüpke and Storch 2013) から出発し、現状に即したアフリカが多言語状況記述に対して、近年提唱されている Translanguaging theory (García and Li 2014) などの新たな社会言語学的枠組みが如何に有効に適用されうるかについて、またその限界について、タンザニア南部のベナ語（バントゥ系）地域における言語使用に関する調査の結果をふまえて考察が行われた。報告されたベナ語地域にみられる言語状況は、スワヒリ語圏アフリカにおいて広く観察されるものであり、参加者の多くにとって説得的な状況記述が提示されるとともに、その背景にある人々の認識に関する分析は多くの示唆を提供するものであった。一方で、説明原理として参照された Translanguaging という（理論的）枠組みに関しては、その可能性と限界をめぐって、またその適用妥当性に関して、白熱した議論が展開された。本研究会はこれまで、スワヒリ語の地理的また社会的諸変種の構造的多様性や、言語接触における具体的な現象の検討など、諸変種の構造記述に関する議論が多くなされてきたが、プロジェクト最終年を迎え、スワヒリ語圏社会言語学の最重要テーマのひとつである多言語状況のダイナミズムに関して、とくに近年の理論的枠組みを参照した集中的な議論が行われたことは大変意義深いものであった。

続く全体討論では、今年度で終了する本課題の後継プロジェクトに関する構想のブレインストーミングが行われた。まず代表の品川から全体的な構想案を提示し、前提として、本研究プロジェクトの成果（とりわけ国際共同研究ネットワ

ーク)を継承しつつも、次期プロジェクトでは国内のアフリカ言語研究プラットフォームの活性化を目指したい旨の説明を行った。内容面では、マインツでの国際ワークショップにおいてドイツ側研究者の多くが言及した「資源としての言語」という視点 (Ruíz 1984 などと言及される言語政策に関する用語としてのそれではなく、アフリカ的多言語状況における人々の多言語使用実践におけるレパートリーとしての言語を指す)をヒントに、多言語状況だからこそ生じるマルチリンガルな現象 (単一言語を対象とした記述研究では「ノイズ」として排除されるような現象)にまでスコープを広げることで、アフリカの実際の多言語混在状況を反映した言語研究をテーマとするといったアイデアが議論され、メンバー間での意見共有がなされた。

(文責：品川大輔)